

IV期 (一般)

受験 番号	<input type="text"/>	氏 名	<input type="text"/>
	<input type="text"/>		

令和5年度

武蔵野大学 専攻科 言語聴覚士養成課程 入学試験問題 (1月8日)

[小論文]

以下の文章を参考に、人と人とのコミュニケーションに視覚や聴覚などの感覚がもたらす影響について考え、1000字程度でまとめなさい。

「やあ、今日は暑いねえ」「まったく、熱中症になりそうだよ」

私たちは、あいさつ代わりにこんな会話をよく交わす。しかし、「暑い」ことなど、ことばにするまでもなくお互いよくわかっているはずだ。それなのに、なぜ私たちはこんなあたりまえのことをわざわざ言い合うのだろうか？

コミュニケーションを情報伝達と考えると、こうした会話は情報量ゼロであり、およそ不必要なやりとりということになってしまう。だが、人間のコミュニケーションにはたんなる情報伝達とは別に、対人関係をとりもつ働きがある。つまり、ここでは「暑い」という経験や感情の共有をことばで確認することが、親しみや連帯感を生み、互いの関係を橋渡しする働きをしているのだ。こうした働きのことを言語学者 R.ヤーコブソン (1973) は、コミュニケーションの交話的機能と呼んだ。

私たちが日常的に交わす会話の多くの部分は、こうした対人関係の維持のための社会的なやりとりで占められている。人類学者の R.ダンバー (1998) がイギリスで行った調査によれば、人々の会話時間の約3分の2は、個人的な経験談や好き嫌いなど、いわゆるたわいない世間話に費やされていたという。ダンバーはこの調査結果を引きながら、人間のことばはサルのもつくろい (グルーミング) の進化したものではないか、というおもしろい仮説を唱えている。

霊長類が他の個体を毛づくろいする時間は、群れの規模が大きくなるほど、長くなるのだが、それは集団生活を営むことによるストレスを緩和するためだと考えられている。いさかいがあった後などには、その相手に対してしばしば毛づくろいを行うことが観察されており、また、毛づくろいによって鎮静作用をもった体内物質が分泌されることも確認されているからだ。さて、ヒトの場合は、他の霊長類に比べて、営まれる集団の規模がけた違いに大きい。必要な毛づくろいの時間があまりに長くなってしまふ。そこで、1対1でしかできない毛づくろいに代えて、より効率的に、複数を相手に行える声による接触—音声言語によるコミュニケーション—が発達したのではないか、というのである。

(コミュニケーション論をつかむ 辻大介・是永論・関谷直也著 有斐閣 より改変)